



# 催眠クラス

女子全員、知らないうちに好んでました

西中珠

©LE-100  
早稲田大学



# 催眠クラス

～女子全員、知らないうちに妊娠してました～

© 2012 GIGA



「気持ちよくないか？ どんな感じが言  
ってみて？」  
「んっ、も、もうやだあっ……わ、わ  
かんないっ……っふ」  
「日誌を書くのに、必要なことなんだっ  
て。がんばれ、委員長」



「なっ、なに、をっ……!!」  
めるめると滑る膣口に、亀頭を押し当てる。このまま挿入したら、  
滞子は処女喪失だ！  
「ひぎっ!? あっ、あぁっ!! っつ、いたあっ……あうっ!?」



「検査、気持ちいいの。さくらさん」  
「だめっ、ちぢぢぢのあーっ。ぢが、はぁあーっ。く  
くる、じ……おんっ」  
みんなの憧れのさくらさんが、俺なんかのちんこで、  
ここまで喜んで顔を濡らせているのが、支配欲をく  
すぐる。もう、持ち物検査なんてごっこを忘れて、ただ  
ただ獣みたいに、目の前の欲望にかじりつくだけだ。  
「は、はっ、んはぁ、も、もっ……だめ」

## 登場人物紹介



元気で快活なスポーツ大好き少女。



コミュ障で話す事は減多にない。



新聞部に所属し、日々ネタを探す。



大地の担任で生徒の面倒見が良い。

すみの だいち  
**澄野 大地**  
さくらから催眠術を教わり、邪な計画を実行しようとする。



ついじりたくなる可愛さを持つ。



美琴の付き人で常に付き従う。



田舎生まれを隠すため外見が派手。



クラスをしっかりとまとめる委員長。



大地の同い年の妹でクラスも一緒。

くじょう  
**九条 さくら**  
鈴藤学園の生徒会長。才色兼備で多くの生徒から慕われている。その外見からは想像もつかない言葉を発し、大地を困惑させる。



生真面目で口うるさい風紀委員。



いつも静かで大人しい文学少女。



新体操部だが極度の恥ずかしがり。



大人気の国民的アイドルの一員。



財閥のお嬢様。男性が少し苦手。





## プロローグ

いつもより少し早い朝、俺はキレイに朝食が並べられたテーブルに座る。

明るい朝の日差しがリビングに差し込み、テレビの音声が空気のように流れている。

まだ半分寝ぼけた頭に、有名タレントが「この火を三秒間見つめてくださいさあい」などと喋っている声が耳に入った。今朝の特集は催眠術らしい。

「催眠術だっけさ」

「ふうん、ちょっと前にも流行ってたよね」

我ながら問の抜けた声に、カウンターキッチンの向こうで、妹の花がハキハキとした声で答えた。

「そうだっけ？ 意外だなあ」

「私は、そうは思わないんだけど」

花らしい前向きな発想だと思いつつ、コーヒーをすすった。

俺、澄野大地は鈴藤学園二年の男子学生で、共働きの両親と妹の花と一緒に暮らしている。両親は忙しく留守がちで、今朝もこうして花と二人で朝食をとっているというわけで

## 目次

プロローグ	5
第一章 催眠術でウハウハ学園ライフ	36
第二章 変態行為はクセになる !!	110
第三章 さくらのひみつ	205
エピローグ	253

ある。

「催眠療法ってあるくらいだから、一概に胡散臭いって言えないんじゃないかな」

「そんなもんか」

「そんなもんだよ。それに、こうやってテレビに出てる人だつてきつと練習とかしてるだろうし。やろうと思えば、お兄ちゃんだつてできるかもよ？」

花は目を閉じてうっとりとした表情を浮かべながら話を続ける。

「催眠術に掛かっちゃつて、お兄ちゃんに好き勝手されちゃうのもいいかも……なんて」

「……花、余所見ばっかりしてるとテレビ消すぞ？」

「あ、だめ！ ちゃんとご飯食べてるのに、いじわる」

澄野花。ことあるごとに残念な発言を繰り返す俺の妹である。身体が弱く、学園も休みがちで、親がいない時はいつもこうして俺に甘えてくる。

それはそれでうれしいが、俺としてはそろそろ兄離れして欲しい。

「そんなことより今日は早く出るんでしょう？ いくら私がカワイイからって、時間を忘れちゃだめだよ？」

「……お前は、俺を学園に行かせたいのか行かせたくないのか、どっちなんだよ」

「ふふふ、どっちでしょう」

まだじゃれつこうとする花を残して家を出た。

通い慣れた学園だけど、こうして朝早く来るといつもとは違った顔が見える。

朝の学園はなんだか空気が澄んでるんだな——俺はひとり感心する。人が全然いないから当然なんだけど。早起きすると新しい発見があつていい。たぶん授業中に寝るだろうけど。

と、そこまで考えた時、誰もいないと思つていた学園に、不意になにか笛をふくような音が響き渡つた。こんな朝早くから登校する奴が、俺以外にもいたとはビックリだ。

笛の音に誘われるように歩いて、たどり着いたのは自分の教室の前だつた。廊下に面した窓から、クラスメイトの姿が見える。

あれは生徒会長の九条さん……だな。これは少しでも会話をする絶好のチャンスかもしれない。

「お、おはよう、九条さん！」

通いなれた教室に入るだけで、こんなに勇気を出したのは初めてののような気がした。そういえば、席は隣だけどうして話かけたのも初めてだった。

九条さくら——近づきたいオーラを放ちながらも、全校生徒の誰もが憧れる容姿端麗な学園の生徒会長で、同じクラスだと知ったときはすごく嬉しかったことを覚えている。

「いっつもこんなに早いのか？ リコーダー吹いてたの、九条さんだろ」

九条さんは無言で、遠くを見るような目のまま、その場に立ち尽くしている。

「そういえばもう少しでリコーダーのテストだもんな。俺も練習しないと」

九条さんは相変わらず無言だ。どうしたんだろう。もしかして俺のこと知らないとか？

「……見た？」

九条さんに唐突に尋ねられた。

「お、おう、リコーダー吹いてたんだろ？ って、そこ俺の席……」

位置がわかりにくかったけど、九条さんが座

っているのは確かに俺の席だった。

「間違えたのか？」

「……ごほんっ」

「ご、ごめん」

「いいえ、あなたが謝る必要はないわ。澄野くん」

名前知ってもらえた！ 顔がニヤけないよ



う喜びを噛み殺す。

「恥ずかしいのだけど、言われるまで座席の間違いに気が付かなかったわ。ごめんなさい」

「いやいや」

間違いは誰にでもあるもんな、うん。仕方ない仕方ない。

「ごめんなさい、それじゃあ、どくわね」

「ああ、うん。なんかごめんな」

そういつて、九条さんはリコーダーを手に持ったまま、そつと席を立った。

……つて、あれ？

「ちよつと待つてくれ、それつて、俺のリコーダーだったりす」

そこまで言いかけたところで、九条さんがはつと芝居がかった挙動で俺を振り向く。

「するん、でしょうか……」

見慣れた傷がついていて、俺の好きなキャラクターのシールが貼つてあるリコーダーの

ケース。見間違うはずなんてないのに、九条さん相手だと敬語になってしまう。

「……見た？」

「見た、と言うか、なんていうか、その……まぢがえ……？」

「……私があなたのリコーダーをわざと使つたなんて、そんなこと……はっ！」

九条さんとの間で、気まずい沈黙が続く。

彼女がどうして、俺のリコーダーをもっていたのかとか、聞きたいことはいっぱいあるはずなのにうまく言葉が出てこない。言い淀んでいると九条さんが身体を寄せてきた。

「澄野くん」

「は、はい？ ……っ!!」

ちよ、なんか距離が近いんですけど。九条さんの豊かな髪がたなびき、俺の肩のそばに寄せられた大きなおっぱいをついガン見してしまう。

「弱みを握られてしまつては、私はあなたの言うことを聞くしかないようね」

「え？」

「そうね、それじゃあ、あなたの言うことをなんでも聞くわ。例えば、毎朝起こしに来てほしいとか、明日から下着を着けないで過ごすとか」

「嘩然とする俺をよそに九条さんは続ける。

「他には、毎朝裸エプロンでご飯を作つてほしいとか、夜寝るときに子守唄を歌つてほしいとか……」

「ちよちよちよっ!!」

「私がなにをしていたのか、見られてしまったのだもの。このくらいしないと、満足してもらえないかしら」

「ちよっ、待つてくれつて！ 俺そんなこと言つてない！」

「あら、そういうことじゃないのかしら」

「違うよ、全然違うよ！ その冷静さが逆に怖いよ!!」

「それでも結構動揺しているのだけど」

九条さんは傍目にはとてもクールな感じの人で、必要なときでもなければこんなに喋っているところなんて見たことがない。それはつまり、動揺しているってことなのだろうか。でも動揺している人がこんな流暢にしゃべるものなのか。

「……それじゃあ、どうしたらいいのかしら」

澄ました顔で、俺のことをまっすぐ見つめてくる。まさか、こんな風に九条さんと話ができる日がくると思っていなかった。きつかけはちよっと思うが。

「とりあえず、リコーダーは返してください」

「ああ、ごめんなさい」

九条さんはまるで大事な宝物を守るように、ぎゅつと俺のリコーダーを抱え込んでいた。……どうすればいいかしら

俺が記憶を辿ろうとすると、九条さんが重ねて尋ねてくる。

「え？ なにが？」

「脅したりしないのかしら。こういうときは、お前の秘密を知っているんだぞ……とか言われて薄い本みたいにいやらしいことをされ」

「わああストップストップ!!」

この人はなにを言ってるんだ。そんなこと言えるわけないだろ、そんな……ごくり。生唾を飲み込み、俺は思わず――。

「じゃ、じゃあおっぱ」

「……………」

「うそですつ、なんでもないです、すいません！」

い、と言いかけて慌てて否定する。いかん、つい口が滑ってしまった。

「ごほん。ええと、別にいいって。弱みを握るとかそんなことしないしさ」

「……だめよ。それじゃあ私が毎日不安に怯えて暮らすことになるわ」

「だからしないって！」

と言いつつ、ちよつと残念かとも思ってる俺がいる。

「嘘。本当は後悔してるんでしょう、なんでもいいから言ってみればよかったって」

「だからそうやって先回りするのはやめろ」

九条さんがシュンとした。あれ、可愛い。どうしたものかと俺が考えあぐねていると、

はつとしたように九条さんは口を開いた。

「……それじゃあ、お友達になりましょう」

「はい？」

「だめかしら」

「だめじゃないけど」

「よかった……私、あなたには嫌われたくないから」

ふわつと、九条さんの雰囲気柔らかくなった気がする。動揺しているというのは、どうやら本当だったみたいだ。

「それじゃあ、これからよろしくね。澄野くんのこと、名前で呼んでもいい？」

「えっ！」

今度は俺が動揺する番だった。

「だめだった？」

「いや、うん、全然大丈夫！ よろしく、九条さん！」

「……………」

なにが不満だったのか、柔らかかった雰囲気が一気に重くなったような気が……。

「……………あ、さくら、さん？」

試しに名前で呼んでみると、雰囲気がぱあっと明るくなった。これは名前で呼んでほし

いってことでいいんだろうか。

「よろしくね。大地くん」

「こちらこそ！」

そういうと、九条さ……さくらさんは自分の席へ戻っていった。と言っても、すぐ隣だから大した距離は離れていない。

(うおおお！ なんかよくわからないけど、あの九条さくらと友達になったぞ!!)

なぜ『弱みを握る』という話から『友達になる』に着地したのかは全く謎だが。俺もだいぶ動揺してたしな。そんなことを考えている俺に、人懐っこい声が投げかけられた。

「お、今日は朝早いね。おはよう」

そうか、委員長はこのくらいの時間に登校しているのか。

本名は、青田夏。明るく、人懐っこい性格で、俺とは昔っからの付き合いだ。

ずっと学級委員長をやっていて、今では『委員長』があだ名みたいになっている。もちろん今も俺達のクラスの委員長だ。

「あ、おはよう、委員長」

「どうかしたの？ こんなに早くに」

「いやいや、偶然っていうかなんていうか、朝早く目が覚めてさ」

と、そこまで話してふと気付く。

「あ、そうだ。委員長、ちよつとき、頼みがあるんだけど……」

ここまでいえば、委員長はわかってくれるに違いない。という期待を抱いて、案の定想像通りの答えを返された。

「断る！ そういうのは、ちゃんと先生に言っ。私は手伝わないからね」

ぐぐぐ……と囁みする俺を見てから、委員長はにっこり笑う。

「私を頼る前に、自分でできることをやってみな。そしたら手伝ってあげるから」

「助かる、ありがとう！」

「ほら、そんなこといつてる暇があったら手動かす。先生来ちゃうよ？」

気がつけば教室中がにぎわいだしていて、聴き慣れたヒールの音が廊下に響いていた。

俺は急いで立ち上がって挨拶する。

「あ、あきら先生おはようございます」

「おはよう、澄野くん。今日は珍しく早いね」

「委員長にも言われました……ははは」

少しきつい顔をしながら、あきら先生も笑う。

雨宮晶先生。俺のクラスの担任だ。長い黒髪に、切れ長の瞳とメガネが似合う美人である。厳しいところもあるけど生徒思いで、この人が担任で良かったと思う。

ただ、俺のことは副委員長だからか、はたまた、ただの手のかかる生徒だからか……わりと目をつけられてる気がする。

「ほら、早く席につきなさい。朝のホームルームを始めるわよ」

あきら先生の一声で、ばらばらと各々の席にみんな座りだす。

ちらっと隣の席のさくらさんを覗き見てみれば、普段と変わらない表情で、席に座っていた。

\* \* \*

長かった一日がようやく終わった。朝から変にエネルギーを使ったおかげで、頭がどうにかなりそうだ。

「あ、ちよつと。あんた今朝言つてたの終わったの？」

「あ、……忘れてました」

委員長に言われて、思わず敬語で返す俺。そう、朝から懸念の仕事とは学級委員の仕事なのだからして、委員長がうるさく言うのも仕方ない。

「今日は委員会もあるから、もう手伝えないからね？」

「……大丈夫。がんばる」

頼みの綱の委員長を頼ることもできなくなった。くそう、手の遅い俺が憎いと、そんな手に刺さるような視線を感じる。

「くじよ……いや、さくらさん、どうかしたのか？」

「いえ。どうかしたにはしたけれど、大したことではないのよ」  
今朝の一件もそうだけど、つくづくよくわからないんだ。

「大地くんは、何時に帰るのかなと思っただけ」

ん？ それはもしかして一緒に帰ろうとか、そういうことだろうか。

「いいの、私のことは気にしないで。たまたま、それはもう偶然に、下校時間が一緒になるかもしれないというだけのことよ」

「いや、それなら声かけようよ！」

思わず突っ込む俺をまじまじと見返すさくらさん。

「いいの？」

「そりゃ、もちろん。だって俺たち……えつと、友達になったんだし」

友達だからって男女で一緒に帰るのは少し不思議な気がするが、さくらさんと二人きりになれる機会を逃すわけにはいかない。

「そう、そうよね。でも私も生徒会があるから。それじゃあね」

ひらつといなくなつたさくらさんの背中を見送って、今の自分の進行状況と見比べる。

……これ終わるかな。

いや、絶対終わらないなこれ。

終わらないと悟ってからの俺の行動は潔すぎて殴りたい。息抜きを繰り返し続けて、気がつけば教室には誰もいなくなつてた。

「……あきら先生に泣き寝入り……はだめだな。うん」

追い詰められて胃がキュッと痛くなる。

「なにをしているの？」

突然、さくらさんに背後から声をかけられ、痛む胃袋が喉から飛び出そうになった。

「な、なんだ、さくらさんか、ビックリさせないでくれよ！」

「うかつだったわ。ごめんさい」

「ああつ、いや、大丈夫だからさ」

そもそも俺が一人の世界に入り込んでいたのがいけない、うん。

「あ、えーと。さくらさんこそ、なにしてるんだ？」

「私は、生徒会の集まりが終わったのよ」

そんなに時間が経ってたのか。手が遅いにも程があるぞ。

「見たところ、結構な時間うなっていたようだけど、息抜きでもしたらどうかしら」

「あ、ああ……息抜きな。うぐぐ」

息抜きは死ぬほどしたようなものなんだけど。息抜きかあ。

「深呼吸するといいわ。頭がスッキリするかも」

言われた通りやってみるが、目の前の状況が変わるわけもない。

「相当追い詰められてるみたいね」

息抜きすぎた結果がこれだもんな。救いようがないよな。

「……さくらさんは、帰らないのか？」

「私は単にうなっているあなたの顔を見て楽しんでるだけだから、気にしないで」

「なにそれ。余計気にするんだけど」

この人、話してみると本当不思議な人だ。おもしろいけど、ただ単にからかわれてるだけのよう気もする。

「さつき、いって言ってたから……一緒に帰ろうかと思って」

おっと不覚にもドキッとしてしまった。でも俺には仕事があるのだ。

「これ、相当時間掛かるぞ？」

「構わないわ」

……そして数分間、さくらさんにジッと見つめられ続けた。

俺が話を振るまで、さくらさんは一向に喋らないのだから、ひとりの時より追い詰められてる気がするの無理もない。話し出したら結構饒舌な人なのに、話すまでが……。

「……そ、そういえばさ、今朝のおはにゅーでさ、面白いことやってたんだよ。見た？」

お、テレビの話って普通っぽくていいぞ。でも、さくさんってテレビ見るのかな。

「私、朝はスッパリ派なの。どんな内容だったの？」

「そうなのか！ えつとな、催眠術特集っていうのやってさ」

「催眠術？」

「そうそう。なんか、意識を集中させれば誰でもできるっていう」

「……興味、あるの？」

「え？」

突然尋ねられて、一瞬返事に窮する。興味か。胡散臭いとは思ってるけど、改めてそう聞かれると……。あ、さくらさんがちよつと不安そうな顔で俺を見てる。

「そうだなあ、もし使えたらいいなって思ったことはあるよ。だってテレビとかで見るとやっぱすげえもん。出来る出来ないは別にして、憧れるよな」

「でも、そういうのって軽はずみに試したりするのは、危険だと思うわ」

「けど昔から興味あつてさ、やっぱ一回でいいからやってみたいよな、なんて」

「……どうしても？」

さくらさんがもったいぶった言い方で尋ねる。

「って言っても知識もないし、そう簡単にはいかないだろ」

「どんな感じなのか私の聞きかじりの知識でよければ、話くらいなら」

「えっ、できるの？」

こくん、とさくらさんが頷く。でも不安そうな表情は変わらない。

「でも、中途半端な知識で誰かにかけてたりしちゃ駄目。本当に、危ないのよ」

「大丈夫大丈夫！ ちゃんとわきまえるよ」

まだ半信半疑の俺は、つい適当に相槌を打ってしまう。

「なら、相手は私がするわ」

そういつてさくらさんは鞆の中からライターを取り出した。

なんでこんなもの持ってるんだ？ そんな俺の疑問をよそに、さくらさんは続ける。

「私相手なら、なにかあつても対処できるから」

そういうもんなのだろうか。よくわからないまま俺は曖昧に答えるほかない。

「えっと……いいの？」

「あなたがそうしたいなら」

内心では胡散臭いと思っけていても、本音を言えば興味津々だった。

だから、さくらさんのこの申し出はすごくうれしかった。

「それじゃ、いいかしら」

学級委員の仕事を忘れたまま、俺はさくらさんの話に耳を傾けた。

さくらさんから受けた催眠術のレクチャーは、意外にあっさりしたものだつた。

「そう、大体そんな感じよ。呑み込みが早いね」

さくらさんに教わりながらだつたものの、上手く感覚がつかめたような気がする。それに、なんだかんだこうしている間に、自分ならできるんじゃないかって気がしてきた。

「じゃあ、ええと……」  
 深呼吸して気を落ち着かせる。そのあいだ、さくらは俺のことをじっと見ていた。さくらさん曰く、掛けられる側にも催眠の知識があれば、知らない人に比べて、よりやりやすくなるらしい。

「それじゃあ、ゆっくり深呼吸して……」

「ん、……すう……ふう……」

さくらののおっぱいが、大きく上下に揺れる。いかんいかん、さらば煩惱！

まずは、簡単なものからだ。

だんだん、さくらの呼吸がゆっくりとしたものになっていく。どうやって力を抜けばいいのかわかっていないからなのか、すごくやりやすい。さくらの呼吸に合わせて、俺もゆっくり深呼吸を繰り返す。

「だんだん、まぶたが重くなってきた……」

かくん、とさくらの頭が揺れた。

揺れる頭に合わせて、視線をちらつかせる為にライターの火をゆっくりと揺らす。

たぶん、もう少しだ。

「だんだん……意識が遠くなっていく。もう、頭がはつきりしないよ」

「……くふ……ん……うう……」

「ライターの火が消えたら、さくらは寝てしまおうよ。大地くんが手を叩くまで、起きられないんだ」

心の中で3つ数えて、ふっとライターの火を消す。すると、椅子に深く腰かけたさくらの頭が、かくんと前に傾げた。

「さ、さくらさん？」

小さな呼吸音だけが聞こえ、反応はうかがえない。

「ね、寝たふりなら止めてくれよ!」

「んんっ、ふう……」

あれ、寝たふりじゃない。ホントに寝てる？

目の前でひらひらと手を動かしてみるものの、さくらの反応はない。限界まで顔を近づけてみても、起きる様子もない。

「成功……しちゃった?」

ほんのいたずらだったはずなのに、目の前のさくらは俺の催眠に掛かってしまった目が覚める様子はない。

顔を覗き込むと、さくらの寝息が吹きかけられてくすぐったい。こんな状態なら、なにをしても起きないんじゃないか?

そんな悪魔の囁きに促されて、まず、目の前で上下するおっぱいに手を伸ばす。